

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

門 滅 聖 村 滅 俗 谱 異

父

卷十

庫	文	閣	內
五 六 函	三 六 八	號	和
一 〇 架	二 三 冊	類	書

六七九



内閣文庫	
番號	和 3688
冊數	211 (76)
函號	156 17

畠 譜

父

卷十

門 滅 沈 村 望 門

二百六十一冊内

内閣文庫			
五六函	三六八號	和書	類
一〇架	二三冊	號	類

六七冊



内閣文庫			
番號	和	30	86
冊數	211	(76)	
函號	156	17	

14
593

記録御用所

東照文庫

龍溪先生全集

子
堅石

卷之四

七言律詩
晴日西湖泛舟

羽葉門經之法不一焉

雄
才
辯

初勝錄

和本達主給加拂 潟川二郎吉高
根葉下経ち

右官學園木造一門 水締十二年
江原國とす。内緒の事の侍院
院門左ども造一垂揚門 手前院門
革手と。信家等と。近て此
切と。是は家の時は學よ
水門城三万石とゆく根葉氏と
名主と。根葉等と。手前院門

信雅江戦功有。雄ノ室ア賜。

景長六年閏五月五日
戸塚と收せらる。後常陸國
新治郡行町の城主と栗原
江と。ゆい二石と。根葉と改
滝門と称。一馬と利多と傳
利多と。根葉と。新治郡の初瀬門
あり。

國立公文書館
National Archives of Japan

National Archives of Japan

加一歲矣。唐長子之年
二月癸卯死。享八歲。在列野。
泰寧寺弘華筆

海門素懷初祖葉芳力

卷之三

癸卯秋暮
高弟九年
古漢題額
而為作之

利氣

卷之三

卷之三

日記

實在沒有說不定義次回

主の御子主へえれに年二月九日
にく初一門五年出仕つ寛ひ少て
駕籠を外宿の日七年十二月有
駕籠長ち林九年又一門五年一月
三月中失初中失の時也。○道無事
有年駕籠といひ。○道無事
有年駕籠といひ。○道無事
有年駕籠といひ。○道無事
有年駕籠といひ。○道無事

有聲
雷、夜
雨聲

大有四書序。宋文公年七
月六日。歸蜀。居於慶雲。是年二
月七日。薨於蜀。是年四月。葬於
死之年九歲。以手葬。

右僅存於印光堂
扇地紙一函
布紋橫幅一幅
色紙詩歌一幅

松竹梅四景一幅

四二幅

利雅

卷之三

補題後序
卷之二
叔爵
金華
宣文十三年十月八日

後漢書
主紀
長沙節

死于立榮葬于名處遺奇相後

卷之三

卷之二

酒後言和郵作五首

敬使君年一月九日
智人宣文三年十一月五日
西小性因日本年十一月
音信四七年八月六日
史家之年二月九日

十二月廿八日役者奉手帳ちの更正日
年十月廿二日奉手帳を領ひの内は
青木吉右衛門教之直承直承の事同文年七
月十二日家給付金年八月廿二日

足壯廻馬込の内年十月八日屋
中内高敷物荷物清須一度太和二
年八月廿二日五斗糸佐木松井物
同上二月長門守の内貞
正元年八月廿二日手帳を領ひ

文永二年二月廿二日手帳同上
紙幣もととぬの内年八月廿二日支
料手帳とか役手帳の内年二月廿二日
支取沙板の役手帳年八月廿二日
支取手帳の役手帳年七月廿二日
支取手帳の役手帳年七月廿二日
中植地代手帳

毛廬^ノ房 一幅

具章^{ハシ} 福祿^{ハラハラ} 一幅

馬王^{ハマウ} 門^{モダ} 紙^シ 一

摺^{ハラハラ} 利^{ハラハラ} 紙^シ 一組

八鶴^{ハチトリ} 紙^シ 一卷^{ハシ} 金銀十支^{ハシ} 紙^シ 一卷^{ハシ}

毛^{ハサウ} 行^{ハラハラ} 劍^{ハラハラ} 一

寛文^{ハナモン} 五年^{ハナモン} 有^{ハナモン} 十日^{ハナモン} 寅^{ハナモン} 之^{ハナモン}

摺^{ハラハラ} 利^{ハラハラ} 紙^シ

利元

摺^{ハラハラ} 利^{ハラハラ} 行^{ハラハラ}

多^{ハサウ} 庫^{ハラハラ} 初^{ハラハラ} 在^{ハラハラ}

實^{ハラハラ} 收^{ハラハラ} 金^{ハラハラ} 摺^{ハラハラ} 利^{ハラハラ} 紙^シ

自^{ハラハラ} 宽^{ハラハラ} 文^{ハラハラ} 五年^{ハラハラ} 有^{ハラハラ} 大^{ハラハラ} 月^{ハラハラ} 算^{ハラハラ} 七^{ハラハラ} 日^{ハラハラ} 之^{ハラハラ}

不^{ハラハラ} 算^{ハラハラ} 五^{ハラハラ} 年^{ハラハラ} 二^{ハラハラ} 月^{ハラハラ} 有^{ハラハラ} 大^{ハラハラ} 月^{ハラハラ} 之^{ハラハラ}

年^{ハラハラ} 有^{ハラハラ} 大^{ハラハラ} 月^{ハラハラ} 之^{ハラハラ}

文昭院領江東郡守御事中大吉
嘉慶二年二月十二日付は甲午
二年十月貞元之子於門寺
に奉

利章

信風

初動之郎

實利祐治官

宝永七年八月廿日奉手。原
年有下二日初入。門寺年十
月十二日家曾。寔元之年十月
六日死。年三歲。身守三年。

利人

大膳

初萬葉。主庫

文政九年二月廿日付。寶元

元年八月自承旨督。同二年
八月八日死。或於此歲。同二年
八月

利福

主膳

初去庫

實利章次第

寛延二年六月二日奉之

寶門。同二年十二月廿八日望
○宝曆二年八月八日發廩
者。有。移。之。廩。同。二。年。十。月。
支。有。序。滿。同。二。年。十。二。月。廿。三。
死。或。於。是。歲。同。二。年。

利康

初取之

實利章次第

大膳

初去庫

宝曆十年七月十日家慶相處
同年八月支日初見。同十二年
七月二日致府加多同年九月詔
日服同。同年十月六日湯渴。
壬午六年八月大亡。死之年九歲
日享子壽。

一頁

初三絶利承

玄庫助 初達十郎 保藏

實毛利國勝ち高里會
壬午六年十一月八日志多家慶。
同年十二月六日初見。同七年
七月二日致府加多同年九月詔
日服同。同年十月六日湯渴。
癸未六年八月大亡。死之年九歲
日享子壽。

利雍

利辟

布力

實處_{毛利國守之妻實處}聚衣燭

壬午五月有日自家奉手口年
十二月九日初見○日本十二月二日
中興天保廿○口七年五月大口聚
利掌育半音而應

宣政七年五月有火之日將往
○口人年六月五日小善清之死○
口十年十二月九日甲府利多之死

「美利

鵠之也

實一貞二男

壬午七月十九日壬辰之日宣政
六年八月九日初見○口年九月

大吉日

至矣津多美少人滿馬

嚴有光風清代

瀧川

立年御白石

源性

新文内侍御家承此號
五七桐 玄度寫

滝門長門守利貞之印

仲中立 初二郎四郎

具章

五種弓母格
万治二年初元。宣文之年。新に
石舟。小山。南薰。畫院。同年。同年。
中興。正義。四年。六月。再拜。小行。如舊。

吉原の同年十一月致宵相模ち
のう傳中ちゆく

叢書屋敷先年つゝを今之承て
肩車の官司局の内九年肩車の官
京都町よりか承て吉原の同家連
通先事清の四種二年吉大白
丸ち在九条下吉原金年半種種
往來年

叢書屋敷序事承ての承
引花の市傳
金引般毛皮
青旗の印力掛
金の印麻生

文政六年十一月八日
年八月八日死于寺に矣

平利

二郎郎助 河野平

正徳二年十二月某日歿于醫
平利 邦房 二郎郎助 河野平
本元年七月吉日入葬于門前
齊天寶殿之左之國門之三
年

邦房

墓金 动水母

正徳二年十二月某日歿于醫
當清 室保二年八月十一日
死于寺之年

利江

娘尼

文政五年正月五日生

嘉慶十六年六月九日
嘉慶九年正月九日家の事と云ふ事
之首原父等の事

奥英 王水 动 红

寶真章、寶

嘉慶八年正月九日家の事と云ふ事
同上正月九日書此處の事

多爾。甲子年正月十日病死。
元文二年正月一日家之宝
正月二日死因于正月二日

利行

銀元

實送行宇志馬相定男

嘉慶十二年正月九日家の事と云ふ事
正月九日之文正月十二日

家督の之文三年一月十六日而丸
只作組。延享元年一月七日丸
日本事

監局 助八助

奥組

延享元年十一月二日丸
一月十日初入。明和元年二月
五日有事。延享元年二月二日
有事。延享元年三月二年二月
有事。

北五稟八國事事

竹大吉 助又太郎 助

實小源文左衛門辰巳男

嘉永六年十二月廿四日有事
七年十二月廿四日有事。延享元年
二月十日初入。延享元年二月二日
有事。延享元年三月二年二月
有事。延享元年二月廿四日有事

具高

行村五郎左衛門同日本十二月三百一
格外隨地之付与村弓同日本時
販之。同六月二日下二百大約時後二
貯八年十二月一日而處

東照宮庚午

渕川

高砂子松右衛門

紀姓

家友屋萬成

渕川左近の監工直義先後事
象仕一木金文左近の居満男

忠信

忠法

天正六年渕川左近の監工仕事

獨子と称す清川氏と称す三重役
彦九郎秀吉の政所の跡印とす
のをもて志士二年後者より李義
長二年或のものと云ひ取解
豈有事と称す。四年

東並木の道を左に西高野山の右に後
西高津往來の置清美りの森

二年

東並木の道を左に尾張國多治
賀の東家九年内侍。四十二年
二月百日七日七歳生別室智
郡彦根邑大林守。尋

法直

左多喜

御金原とて。嘉永十九年九月

十一月九日

時威

豈前

某は長子今年父亡西屋利左衛
兵衛善清彦成の後^妻波府^妻を出
され源氏數仕一屋利^妻に^前有
治^妻と大波支津^妻と^前有
永平年源氏數^妻と^前有^妻付
うき口^妻と^前有^妻付

寶^妻と^前有^妻と^前有^妻家

乞^妻と^前有^妻と^前有^妻祖

恩尚

又左衛

寛永十二年源氏數^妻と^前有^妻
兵^妻と^前有^妻別家^妻と^前有^妻
同^妻と^前有^妻と^前有^妻

直政

典元

實海節开郎忠山

聲吉

至無事御坐之命に父忠松屋處
附うつてゆく如故武子松左右年
七朱と申ぬと申ふ。貞八年
在後後承御りて御事。室永二年
十二月ノ有御の四利也御。

四年甲子壯組。癸未年十

月晦日死。年十二。湯乃驥祥
泣不尋

儀

五年癸卯。十五年左義清

慶安三年十二月十四日家督小言
清。万治一年七月。御事。忠の道
わのち。寛文七年六月。左右年

拉八國同守立憲

文
獻

楊廣等十至人處死而

初征長安賦

詩
卷之五

卷之二

宣文七年七月六日知州事
宜興縣自任性道之不滿九年
度支同知官九月九日到國
門年十二月三十日布衣門
年三十

一泊母國を蘇城。西門の官邸
有志同僚の四年十月の日記
付。日本年十有七有月之二十一日
十二月廿日。日本年九月廿一日
日本年三十九有九月之三十日
十二月大内叙爵。酒席。日本年四月
五度の謝恩。日本年四月廿
日本年八月十九日
常憲。元敬。津葉。母。不數。玄子。核。相。辰

○家水元年十一月廿二日當町店
契文有事為門口。曾是〇日水年
二月一日相約是事上事。今。某管
酒。有新。小善。酒。經。死。〇日。三。年
一月。有。宋。祖。與。次。〇日。三。年。十
月。七。日。移。移。〇日。三。年。九
八。日。之。酒。體。代。〇酒。九。背。其。日。而。
育。中。有。酒。鴻。〇日。九。年。青。十
日。墨。酒。為。次。〇之。文。之。年。食。食。

高。水。元。年。十一。月。廿。二。日。

後。明。後。數。少。酒。用。店。更。附。附。
將。酒。後。數。少。酒。之。酒。三。年。十一。月。
水。該。首。村。地。金。多。少。人。左。右。右。
月。水。酒。之。
万。酒。部。不。正。使。生。酒。國。財。五。歲。
〇。延。享。四。年。十一。月。三百。死。少。歲。

永保

葛次郎

正徳二年正月八日忠勝の事原に算
青土門智子門九年第正月
死于國門年

春章

源三郎

左衛郎

實吉國之助主義里

正徳二年十二月廿日算吉の日
年正月廿日智子門正年第十二
月廿日忠勝門正年第十二月廿
日忠勝門正月廿日忠勝門正年第
十二月廿日忠勝門正年第十二
月廿日忠勝門正年第十二月廿
日忠勝門正年第十二月廿日忠勝

一興

沙元泰

左金高

右角

左赤

宝曆十二年十二月廿七日家慶
布水次年有正月丁酉年正月廿七日
宝曆十二年十二月廿七日中華年
日本年壬寅正月乙酉年正月廿七日
日本年

元鄉

源

彦齋

美玉堂三曾

天命八年二月廿四日吉言家慶
年正月廿七日丙子年正月
廿七日中華年正月廿七日
名稱之使及丙子年正月廿七日
正月廿七日滿之子越之使
日本年二月廿七日的以信事

○壬午六月廿二日
八年十二月十日西元消

東照宮御文

卷之二

紀述

三九面白石

家政九門三事記
花代

卷之六

右近司監 动之而 伊豫

河間府行
和年
法施
陳
不
觀
有

一
七

総司歎すのみとし濃利資のとん
幕下に至れりわが軍をもて往
伊豆征勢を圖るゝ二郡と仰
神戸城を屯すのり長崎城を抑
天正十年甲子剣進伐の内脇松文子
を手捕へ城の外はおもづからず奉
行の船を威はゞ佩刀薦人をもてて
を率ひて之を攻撃せば兵士は驚き
て奔逃するに従事せんに至り
本陣圍ふるに従事せんに至り

い間、別の官領と補
伊豫ち
称へる事爲様となつて。正に古年
齊、久々に、詔勅廢棄地をも次

一時

文獻初八

總題一初祖
卷之四
後漢書
丁亥六月總題

某國經理亮勝家鐵也主事代理と
至るをと能く、時獨家商隊のよ
りもともと如様にて、一時も甚度
家の口ひきを背うらむべし。旧
支那より主科とある。却く東洋
に當る。日本二年、某店家より貰
希リ。居、一万五千石の利潤が
約。日本獨創。信頼と合致の付
一時もよほまく。信頼と計

ら御用事無事と雖、手をと
て有り。之は、自らの手事と見
え。此に、極めて、大うて、獨創
の、多大な人材を、一時も
大和太爾吉に、取られ。文庫不全
で、藍文、うち、萬葉と、と、一時以降、
度々、秀吉と、作成を。また、
所、も、墨幕方に屬、文庫を

東風來津而至而至而浪人の方
在れ、在れ、在れ、在れ、在れ、在れ、在れ、
是參下と參下と參下と參下と參下と參下と參下
之年石田之國清被の内國事は休
奉の日本年

壬午夏月附る日本ノ病を
下落玉と云ひ、日二百
兵衛清成、江戸ノ事、之に
あらゆりて、葛西、諸門、

御紳士を以て一時此處の多々
主事多々主事主事主事主事主事主事主事
之は日本大本丸船を徳ち不支給
さすと捕獲せしむる
兵衛清成、江戸主事
少主事主事主事主事主事主事主事主事
之取扱ひ、主事主事主事主事主事主事主事
長年六月二十九日正午

一
三

之
卷

某君、年を重んじて、猪鹿ちどり（父久助）
曰く、君は即ち野村の子と云ふので
貴方種々仕事も猪鹿ちどりの
ものと内々思ひ、之をうへて思ふの
不思議と申す。思ひ、うへて思ふ
事なり。大体のことは家業にて、下

さうで、僕はもと日本書院野村
の先生のひいきの筆の経旨の如き
を御奉茶の小児（莫ちの御子）ゆ
くに思ひて、すこしの心事も
咸々没落したる年月の四年足らず
伍復（五つ）の間、一ノ山の御書院
余人ともうなづかぬゆゑ、まことに
ては作らず、再び之をあつて
續（つづ）いて、日本書院の

二方の御代をあがむもしくは
あさまの名代よりこそあれりは
一の内へとまわらるゝよし
四年足らず材角を屬する庵
川元郎と住處をもとめれ
左うほたゞ六七のまゝとて
右さく節を奉事する元郎
角を守る所多くあるにほ
伊勢守の代一

お不善一ノ節を免められ
のうり二面をすと此へとくゑ
二年足らず材角を属する元郎
角を守る所多くあるにほ
伊勢守の代一ノ節を免められ
やうゑ一ノ節を免められゆく
別の方面を守られゆくゆく
やうゑおもてを守られゆくゆく
伊勢守の代一ノ節を免められ

名倉清敏思

大藏清敏存也。日本年書後萬

文父及式のと多人社平清之郎

清之郎の清之郎の川越の間

一也の清之郎の川越の間

名倉清敏裏市主之方郎の貿易

之方郎の清年が新都百石

日本年少清休也。日本八年

平賀清之郎文五年。日本是也

一役

八郎左衛門

原年八月既往。名倉

年有九

東

久郎

一高年八月既往。名倉

上好

清左衛門

寛文二年六月五日書
寛文二年十二月十日家業事
保元年二月七日病死
貞二年外葬生立教寺

上編

久而

之承八年九月六日初子定
年四月有旨原性總。享保八年
有旨有敕。保元年二月有旨
行移。保元年二月四日之承
之承五年三月五日有旨原性
總。寛文元年十月有旨有病之承
舊元年六月有大年之承。原承

奉

一因 八席大寫

實門以之席一威留

至文官年六月十九日署事院定
享平年一月十一日署事院定
令頭役。官屬三年一月九日定
門屋年九月四日家管。門屋定

門屋有錢財。而存於門屋。青
首存於門屋。今頭役。門屋年。青
首。存於門屋。今頭役。門屋。青
首。存於門屋。而存於門屋。

一昌

久而。八助

至文官年六月十九日家管。門屋二
年十月廿六日存於門屋。今頭役。門屋

秀○四○和○四○年○一月○吉○有○新○村○高
橋○以○後○平○永○成○明○和○四○年○一月
支○有○宗○性○得○同○一○年○二○月○八○日○慶
会○筋○正○代○川○村○村○村○服○之○代○之○多○久
本○昌○之○百○里○之○山○野○行○山○本○昌
門○之○年○一○月○吉○有○小○浦○四○年
十二○月○大○日○布○衣○四○八○年○四○月○十○日
支○合○大○内○不○年○四○九○年○四○月○十○日
國○軍○有○其○日○西○浦○四○三○年○宜

一都

王水

吉○有○新○村○高○橋○一○月
吉○昌○流○滿○之○今○之○夜○四○一○年
吉○有○火○塗○之○代

東照宮御代

瀧門

三輪屋

紀姓

義姫本丸

瀧川左之助監査取役

二九郎一忠忍

一積

三五郎

仙齋園之中村一角方木

嘉慶八年六月一日前
許大深
相往ちより多仕度す者と相應す
う事快く來一候む府主へさる
うち日本七月十八年かくの府主
官主をされ候ふよしとての事
内務省の様に此久而て未だ未だ
沙士高多様ふゆく是度よりの大
臣政事庫候まつ政事庫より主事
の仕合とあじの宣示水年

嘉慶五年正月廿二日
内侍主事力の利。南金馬仕事
がよき収支のものだれの主事
蒲生中務少翁人跡アシタマ
済勤氣とみめり浪人ともうの元

十二歲



上

五郎

利發本心

寛文二年正月十九日 原木首領
御筆書送致。宝永四年九月十
九日病死。同五年正月二十日往
○享保二年三月十九日太曾永年六
歲卒於松泉寺。以卒。

一政

助九郎

之孫六年四月組。同七年

原木首領。同八年病死。
龜戸一原木。收于宝永二年
十月十九日。同八年正月

之馬初至

實謙原外記。重慶二年

之孫八年。有志子。宝永二年
九月十九日。同八年十一月五日
卒。同八年六月五日。葬。

一重

日本ノ事ノ記

十三席

一稿

寒水和清平而勝之

享保乙年有吉日之年八月
一百零九日丙午有吉日之年八月
五〇四年十月丙午有吉日之年
五年丙午有吉日之年八月

總合之次。日本ノ事ノ記

日本ノ事ノ記

八席

上名

本水六年有吉日丙午有吉日之年
四年四月丙午有吉日之年丙午
年丙午有吉日丙午有吉日之年丙午
大日丙午有吉日丙午有吉日之年丙午

死不擇是日卒于奉

一通

三九郎 动七事

實令義方京可美之勇

天祐之年十二月廿七日賛奉手の内
某年十二月吉日家移門下年
十二月吉日小姓總門八年二月
三百大約之原可往承

大猷院殿源代



鷗川

三首屋

家政屋本風
花舟

紀氏

鷗川久助一系二四

久助

一歲

某年十二月吉日家移門下

歐真院殿家政屋本風
花舟

枝松。日年七月逝。至後少善。清。
万治二年。○事後。又。室。文。今。家
康。未。之。有。後。日。今。年。七月。三。百。
和。和。康。未。以。收。之。室。水。只。年。育。
廿。六。日。死。牛。の。寺。町。松。原。寺。奉。

久。廊。

一。庭

寶。多。昇。伊。留。多。守。家。本。
實。多。須。源。多。守。家。本。之。宮。

宝。多。昇。年。有。大。一。白。之。松。高。之。事。
保。之。年。有。大。一。白。之。松。高。之。事。
保。之。年。有。大。一。白。之。松。高。之。事。

保。之。年。有。大。一。白。之。松。高。之。事。

一。妙

玄。祁。初。久。用。

庚辰二年八月廿日立文
立本十月初一日起至丙子年正月
二年二月六日丙子年正月立文
日月立文年正月廿日丙子年正月
年正月廿日丙子年正月立文

一奥

手次郎

明和丙子年九月六日立文

丙子年正月廿日立文
八年正月六日立文
八年正月廿日立文

大毒寺之松平信昌之屬

國會

清正

源氏
家政主事前事
武田刑部少輔信昌只代清門同殿
某處

三首參議

家政主事前事

はるかに城代相成の内家より
御者とゆのうち海人の事まで
付さる

「東　六月

松浦貞秀家たゞが

「奥長　度支

至永二年四月某日四條守義益
枝持。寛文九年十一月三十日。四條組
加賀へ往候。貞永二年四月八日聞
弓子右衛門貞秀。津浦宗達。而の
時政。てまふ。三浦。小納戸。総入
一。一。通奉。同年十一月十八日
至永。山善清。同月。二年。四月
死。平一。國深川。布藝。二年。

奥寧　基之助　小左衛門

奥寧二年七月十日家書。同年十一月十九日而生之。正室不產。之宿二年十月既同月。同年九月立花勘定。正徳二年八月十九日死。大福殿。同年三卒。

奥寧

少左衛門

正徳二年十月十九日家書。同年育立花勘定。同年十月立花勘定。同年十八年八月立花勘定。是組入。之次二年十月一日戊辰。寛延二年七月十四日小左衛門入。宝曆二年十月二日癸未年二月。日本ノ事。

貞儀 清風初 庄吉郎

嘉慶二年十二月六日初丁の定席
今年十二月五日家承。門七十年
二百七十石足半人銀。口八年八
月八日死難於家門八年三尋

惟一 小室和小之郎

實佐名次左金多喜存男

宝慶八年十一月廿日吉多喜存男

明和六年十一月六日初丁口八年

育土六石足半人銀。口八年

育土七石足半人銀。口八年

日洋三石足半人銀。口八年

年六石足半人銀。口八年

教育省關稅門禁年一月
支那而至蘇聯之門禁年三
十月廿日年九月。宣政令年九

日癸卯歲

支那之年一月。支那令之役

日本年九月上

濟潤度取支那之年一月關稅
日本年一月。支那之年一月關稅

之

貞一

基部

宣政令年一月。支那令

東照宮御代

龍

初大富

吉百之信臣像

源能

家紋

二重龜甲之白銀

先祖不審

太監義助 波瀬又助

恒房

東照宮上元應元年於三島是清

右毛利遠易を號す即入國
而佐江之部町名大是助也
中山ノ流又助と名前子洋領佐
○天正八年湯切東吉與儀三
人扶持洋中向後○寛永七年
二月十八日死漢率貞源幸葬

恒信
又助
兼助

家昌○家中昌氏○元保二年
二月十四日死葬

又助
信助

恒忠

家盛○家中昌氏○文寶三年
二月七日死因寺上葬○右源助而
恒房の三代家中昌氏相続矣其名
之代有又助恒忠男子玄次家断

平八郎

信宣

瀧又助恒房二男

東照宮於高麗情狀中之記載
○万治三年六月十日北國奉
右家助南附瀧又助至衛家

恒知

三十郎

瀧又助恒房三男も慶安二年
生れ御子也有儀○同是八月
木立日橋田御殿瀧附人○御
守儀御中名久○

清揚院御石室上御傳野御成
之部御傳野御水為御財
上意也御傳野御水為御財
御傳野御水御外御役遣
御免御花押下立等○元禄

元年正月高免少吉信○日二
年正月奉頭山田年陽成○
△伊東源氏人坂井利也之子
得良院哲村又枝孫女○門
士年九月本宮死士生景同寺
上葬

恒貴 源内

実波道富國鑑三男
於橋田沖助天和二年正月參予
○自享元年見習○同二年
正月改役折方文人技○元祐
元年正月又改役山中良民○
同軍家參予正月後、日百千
口俵六斗○同軍正月高免少吉信
○嘉保十一年正月○之支事
正月二日死七十八歳和卿永福等

上葬

新嘉湯

好房

寔大園源實正信二男
享保十年青土月養子。同十
年十月二日家繼小名喜
○因十七年十一月十七日
后手方相幼角也告喪了。○延

文年八月十八日陽后。○寔延
四年四月十九日死六十八年五
等正寺上葬

恒好

文嘉 新嘉湯

寔萬壽寺源慶之孫二男
享保二十年八月十七日被養子
○延享九年八月十六日家繼○

昭和三年二月木七日病免小室
同年七月九日隠居○安永三年
吉十六日既七十蒙承賜自原
寺上葬

邦好 又齋 原平市三郎

実猪保庄右衛門 菅英二男
寶曆四年四月吉日養子○

明和二年七月九日家督○聚
宝年吉六日之配勤之○同七
年吉七日武昌上足跡而
筋道移孝見方御用銀拾枚○
安永二年二月吉日家督改
而用金三枚○同三年七月十
九日家督改而用金三枚
○同四年吉六日家督改而
用金三枚

本七日日光市社奉詔於金二千
○因年六月十七日伊復良人浪七枝
○因年七月三十日上野中堂諸
堂社佛像供御用○因年七月
九日伊復良浪拾立枝○因年七
月六日伊勘定之○因年七月
農品勢入門之奉詔於金
式牧財役○因年七月十八日歸
府印目見○因年七月三十日伊
復良金數付於三万石

因九年二月二十日園東筋門
以舊信部用印付之○天明元
年九月十九日伊復良金式役
因三年五月廿日尾高深川勢
川之奉詔○印付因年十月二十日復
金式役○因年十月稻荷山
燒香武足上尺信良浪入竹原
村記送系川除以舊信於伊
○因年二月八日復金式役

同六年八月三日金浪融通用
大坂正服金或役时服二〇日支
八月四日小笠入〇天明七年十
月十五日先達島伊助是右助合
銀後國新改之候奉事方不
約居候既定外事並和〇同掌
一月十五日若柳源〇同年八
月九日死于同上

貴達

權次郎

寛政七年十一月十七日家業小官
清〇同年十一月十九日初見

橋田門致



瀧

藤原姓

家紋 蛇、三色

先祖鎮守府將軍九邊清將監
利仁末葉產張國侯加賜清
某織田信長公往千貫文給足
仰七種人之頭牧之源於久
其男加賀鍵齋安房源

丹波守上鍵大將相勸之言
由門侍加賀守鍵直安房守
龜島

右龜島初守様因御願止
石上守伊達守處所御願止遣
清本守止作守主勤疏充充
安久守之續之在養子主義公承
領之通止 伊守止

文昭院幼西守為入主清守仕

如之親守平不滿奉公相勸之至
宣永三年八月廿四日紀合中以雲
寺上卒

安久

左直

實加者半在龜島

叶奉引

桃田於守歿元祐十一年十一月
養母龜島某須通承親之至

活物奉百俵三人役者八十人組
○同十七年四月半十人組与人加賀
石俵毛名若皮於方子山百俵
文昭院妙圓丸為入粟伊勢
○宝永三年四月養母處之免
同年十月在處之取事少切木於
五石之空地百俵三年滿正都合
此旨奉北俵三年之免○四月
年九月吉日北國年上免

安昌

九郎左衛門

寅之役喜左衛門男

寶永四年四月養母

七月庚辰日賜小室在○同

年八月十二日甲府勤者○同

九月十八日高賚之節一日御見

○寛延二年八月本四日北牢家

甲府遠光寺村主免之免

市兵湯

安悅

○寛延二年十月二日家督小當遣
○安永七年六月初見○因書
甲府山縣○寛政二年七月廿三日
西清畫格駿府勤尚○

安章

仁齋

助子

宗根長兵清承促

安永二年六月奉養子○寛政
九年武術少今味牙仁齋安章
以是教於同年十月於極西存著
元和六年武術少見方○丙午
青月序名往常○武術生精
佳能遠

序聞寛政二年十月六日部屋

至是切算或有後未立駿府勤尚

東照宮御代

瀧村

源妣

三十七指傳之大枝持
家紋角扇前翠

久祖不審

長壽

朝肉

東照宮
至參拜院
為附於驗可常作御之者取

古勤○大坂陣之部南龍院幼
少陣湯山少陣羽織為進
而吉良○平成紀限山少佐社○
平成年表 布入之部當代
○寛永八年七月七日死于家
葬於紀州之庄

短明

長左衛

寛永八年七月於紀州家
養珠院幼少陣弓吉良拾八歲
天正即意高元服少作身少佐
○養珠院幼少陣弓吉良拾八歲
歿於少養珠弓浦尚○天和元
年十月二日死立棺九乘喪
周通寺之葬

短慰

和僕

天和二年三月四日承當○元祐
十六年奥役人○玄成○寔永
三年小十人格○玄成○正徳元
年青旦一日

長福君即誕生之吉節用以作
仰肥衣御詔於之後恭節誕七月
未滿半岁在氷川神社奉斎
之吉慶頌於辰之月大吉至大
仰所物之不有也○玄成年青旦

小次第致而其是為入玄成供
仕○四年青中玄成少而角
添齒○四年三月六日亥辰辰次
乃用達酒之首二十俵致於玄成
儀子○四年青月有此七十案
同寺之華

矩傳

初朝刑

玄成

玄成

享保十年正月廿日安葬小糸
○同十一年正月廿八日鬼丸小十人組
○元文三年正月三日同組鬼丸○
延享二年正月廿日富士見御賓
在焉之以○寛延二年正月四日
死五十七罪同寺上葬

姫平

加賀
留名
松立郎

寛延二年九月二日家督小糸
付○寶曆七年正月廿七日鬼丸
小十人組○同十年正月廿日
鬼丸院納沙門○同十一年
鬼丸院納葬師并同年正月二日
頭共二和門十九劫○同十一年十二
月十五日以吉兆鬼丸
孝恭院納沙門○安永五年正月
廿日同組寺上○同八年

孝恭院飯 費年四月
十六日政共年六月九日年四月
有十八日政共年四月九日年四月

義君年四月○同年四月青土日死
六十三歲因寺一葬

常入部

矩包

安永九年三月十六日政共年四月

初見○天保四年十一月十六日家
曾小喜活○同八年十一月十五日
小喜活一回即覗見

東照宮内代



澁野

三木良信

右京院

家紋 江原
破綻

先祖不寄墨斧以示甲子那作
作未承不序一而顧沒為後
刻毛河之行澁野伊萬畫於

系

名宿法下

野次見利小こ醫掌施行波美
多事ト仕事のち

東照宮ノ石舟先生御靈師古面不仰
○慶長九年丙寅連枝松年譜度ち
忠吉の御前御史病有也瘧疾
れ付御子之少少之少御師之子
右江鹿流作成也此後於右
要恨夏秋

東陽縣志稿

忠貞公小傳
至千石角人
年二月八日
卽云後病卒
也時在八月
京郊行醫

天樹院敏大坂表（印）樂（印）
東照宮御府印至城（印）也（印）之（印）
人面石下（印）天樹院敏印鑒（印）
又入樂（印）大坂表（印）伏（印）死

定一
カツイ
為伯法楊

古事記一初。父の天樹院御医師。長平年大正丙
城は不善忌方。又御医。死。○和氣之年九月十九日死。法事不
法事不舉。

定收

名前法服

父の天樹院御医師。原
法服。宣文六年二月一日在世

満通之後橋田少敬御医師書
後仰。○延宝之年八月一日死。門
寺小糸

定收

名前法服

延寶之年家督橋田少敬書
医师。宣文之年八月一日死。門
寺小糸

元周

之赤

宝永之○七月廿日父高小重居
○日本十二月廿日未未之少重清
○享保九年八月十二日甲府勤番
御醫師日本九月癸巳年九月○十二年八月廿日行仕
○丁十八子直月十二日八十二歲別
于松院小葬

五之

高高 松柏

寶永之○七月廿日父高小重居
養子○享保十二年八月廿日行
甲府勤番御醫師○之文五年
六月廿日入高高○乙卯日行
葉飯之○四月廿日未未之少重
○日本十二月廿日未未之少重清
○丁十八子直月十二日八十二歲別
于松院小葬

松軒 元庵

四教

夫 小室山佐
松平忠定子の夫

寛保元年卒齋年。享二
年十二月八日家臣父の子
○宝曆元年十二月大定日死年
六歲山子小發

元智

元甫 文藏

夫 玄之次男

宝曆二年二月八日生。子家翁
因八年二月十一日勅旨御醫師。
天明二年七月初日江戸吉之右衛
門院。同月十日正月の事。三
年十月下二月死于江戸。年

小發

道寧

元壽 元長

東 四教次男

安永二年六月廿日吉子の玄孫
二年十二月五日家彦の玄孫
五月七日勧善門医師。○四九年
四月六日志摩市善醫師津助

元乾

秀和 信貞

東 元智次男

寛政元年六月廿日吉子の玄孫

寶生初。○四年八月十七日小
糸佐生井教次男

大歎院殿御代

龍野

之首

源性

家紋

虎頭

先祖不審淹仰後考忠之重祐
家系不一後承人多參詣而
無從考之庶淹仰舊多所遺失
為頗

忠臣

又云

七

大藏院敏中代五院少輔。子仲直。孫廣人
人持。因唐之年因也。勿念是某
あくまくちよの後孫少輔。又文
11年作死

忠光

左衛

寛文12年九月安葬。延宝9年
11月定。天和2年9月園東序
仲良。延宝11月亡死。淡

兵ひも小糸

忠隆

左衛

夫。詣訪洛。清相。深翁

延宝2年9月十六日。年。養子。11月
11月。11月。11月。11月。11月。
11月。11月。11月。11月。11月。
11月。11月。11月。11月。11月。
11月。11月。11月。11月。11月。

元亨七年九月辛未

忠郷 助平郎

夫心爲家七郎行條次第

寛永二年九月旨多義子家督

○延享二年九月十三日

太師所附少人○延享二年七月十三日

一統小臺書。○延享二年七月十四日全臺
役。○延享二年十月六日死于延享二年十一月

寺家

忠昌

左近郎

夫久向佐多添監吏二官

寛永二年九月一日卒。養子。

○延享二年十二月六日承旨

吉徳院於都代



三言後人扶持

源性

家政 天草

生禪不審

久萬

保章

吉徳院於都代廣長主年保章

嘉慶二十七年六月廿日

東福門院御内侍御飯茶身
多喜人扶持少成東都（在）江原
湯原安瀬源吉撰。寛永二年
二月廿日死

保者 八翁不寫

寛永二年二月廿日死又可（之）
一〇五七〇二月

東福門院薨于山中湯原地（下）

安政元年正月辛未日死。是年
年三十日死。是年時興家
葬

保者 朱右全

大和元年七月安房。是年
八月元大、壽日。十二月加持
主食爲食。是月。之承子
吉田元昌。是年正月

あらまの白居もとが。延喜三年
二月十九日奉行。四年六月
安貞死。同年に葬。

保明

勤在室

延喜二年二月初。四年九月
脅。延保二年二月而死。小人
〇四年八月十九日死。同年葬。

保正

八郎左衛門

享保十一年二月安葬。九年
二月而死。小人。寛保二年十月
十七日死。因ち小斎。

保通

久萬

丈保明次男

寛保二年十一月安葬。九年二
月而死。小人。寛保六年七月

久日死國事

保孝ヨシ
長郎

天天尾
朱木不允萬正之次男

寶曆二年庚午八月急喪子承信
○四和八年己酉五月死或葬八塚

日ち承信

保卓 天允萬

天牛久又八郎重甫男
四和八年七月己酉急喪子承孝
家安。承孝四年七月人曰號半
人組。是年間有大日門卷
勅。寶曆二年六月九日庚午小吉
日七日三月天日死足後回斂
同上

保効
天允萬

寶竹木作物貯藏
嘉慶七年二月八日
卷



